

弟

TESHIKAGA SURVEY

子

町勢要覧

2010 (改訂版)

屈



【弟子屈（てしかが）町名の由来】

アイヌ語の岩盤という意味の「テシカ」と上という意の「ガ」から成り立つ。「岩盤の上」という語源は、その昔アイヌの人たちが釧路川で魚を採集していた時、現在の市街地付近の川床には岩盤が多くて魚網を仕掛けるための杭を打ち込むことが出来ない、「岩盤の上だ!」と嘆いたことに由来すると言われる。また他説では、「テシ」の意味は梁（やな＝河川で魚を捕るための仕掛け）であるが、地名に残るテシは、天然の梁のような姿の岩盤とある。いずれも岩盤の上、梁のような岩盤の上という所を表わすアイヌ語が町名となったわけだ。

【てしかが】

位置 *Location*

東経144度13分から36分、
北緯43度23分から42分の地点
標高102.7m(役場前)

弟子屈町は釧路・根室連携地域の北部内陸に位置し、西北面は高峻なる山脈をもってオホーツク連携地域に接する。東は根室高原、南は標茶町を経て釧路湿原へとつながる。

広さ *Territory*

東西:28.8Km
南北:31.0Km
面積:774.53Km²

気象 *Weather*

平均気温(※)
夏:17.7℃、冬: -6.7℃(弟子屈地区)
夏:17.7℃、冬: -8.2℃(川湯地区)

一般に冷涼な気候で年間平均気温は5.0℃。初雪は11月上旬、降雪量は50～100cmと比較的少ないが、その分寒さがきびしい。12月から3月までの平均気温はすべて氷点下である。そのため土壌の凍結が著しい。だが、冬期は大平洋側の天候に準ずるため、概して晴天の日が多い。

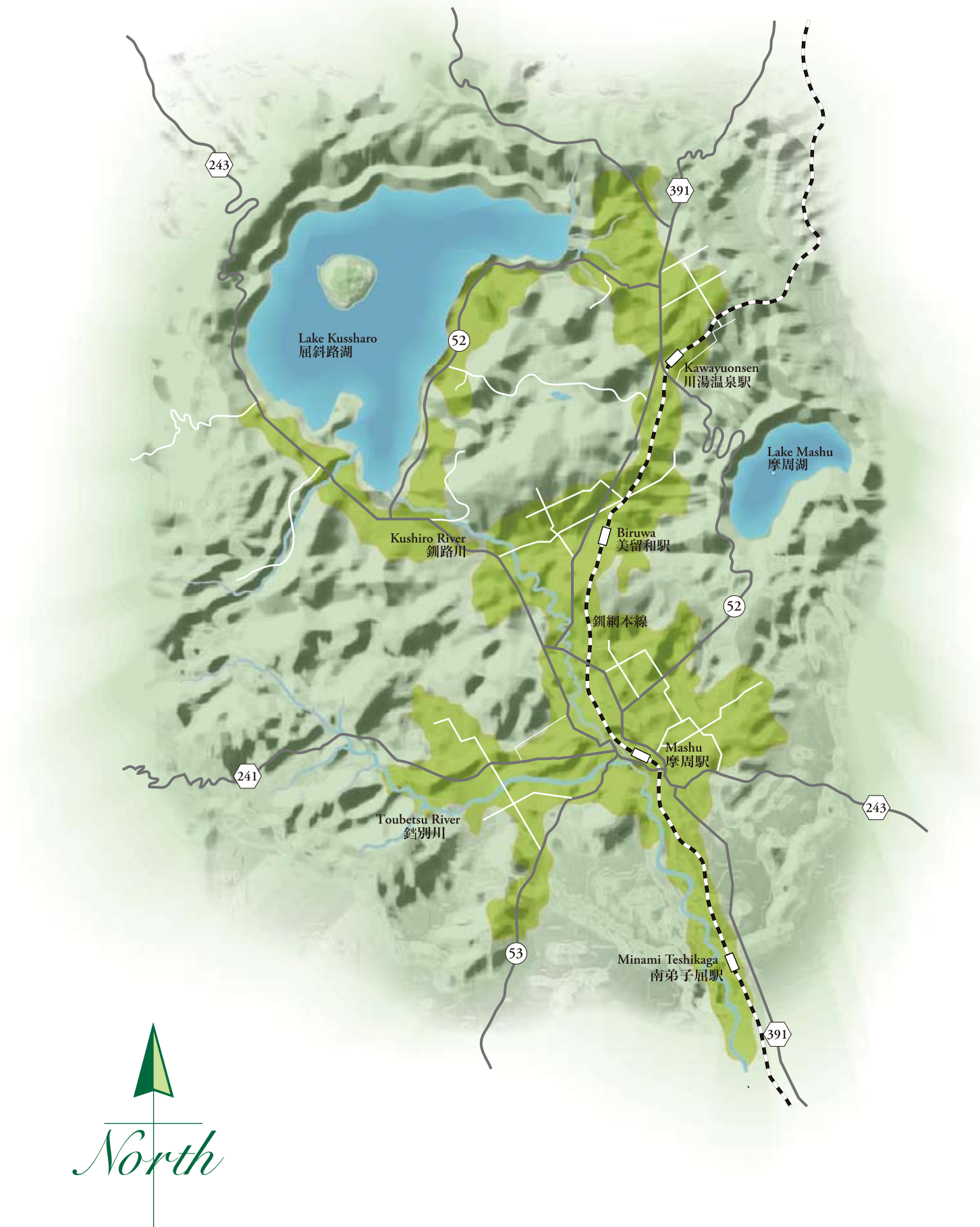
(※平成22～25年までの平均気温)

地勢 *Geography*

千島火山帯に属する本町は、世界有数の規模を誇る屈斜路カルデラと、その東側の摩周カルデラの山麓を含み、その中央を屈斜路湖から発した釧路川が貫き、火山活動によって生じる原始的景観、温泉などに恵まれた風光明媚な土地柄は、まさに国立公園の名に恥じない地域である。地勢はおおむね起伏の多い波状丘陵地にあって平坦な土地は少ないが、山林が約70%を占めるため、森と湖と火山の絶妙な景観を醸し出している。



弟子屈町





私の好きな「てしかが」の自然



チシマセンブリ



トウゲブキ

国立公園の中にある町と言っても過言ではない弟子屈町には、自然環境の美しさ、不思議さを物語る材料は山ほどある。

摩周湖であれば、透明度41・6メートルの世界記録を持つ湖水の清澄さであり、歌謡曲「霧の摩周湖」で「躍有名になった霧の発生であり、近づくことのかなわなない湖の神秘さなどが挙げられる。

そのひとつ、水の透明度は1931年の記録をピークに現在は20メートル前後と下降気味ではあるが、日本を代表する湖であることは今も変わりはない。流入する河川も流出する河川もなく、湖面とカルデラ壁に降った雨や雪解け水だけを貯えた自然のままの湖水として、近年では国際的な環境モニタリング組織の環境監視地点のひとつに選定され、地球規模の大気汚染の調査湖となっている。

摩周カルデラに1千年かけて溜まった水質の純度は、長年にわたり観測を続ける南極の分厚い氷層ほどに貴重な存在なのかもしれない。

ところで、摩周湖には、国内外から年間45万人を超える観光客が訪れる。その多くがレストハウスのある第1展望台か第3展望台、あるいは裏摩周展望台から霧に覆われた湖か、または摩周ブルーと呼ばれる神秘的な湖を眺め、旅の記憶とともにカメラに収めるのが一般的だ。

ちなみに夏場に限れば、80%の確率で湖面が見えるという。霧が覆う湖を不運と感じるか、より神秘さを感じて再訪を期するか、人それぞれ千差万別の感じ方があるだ

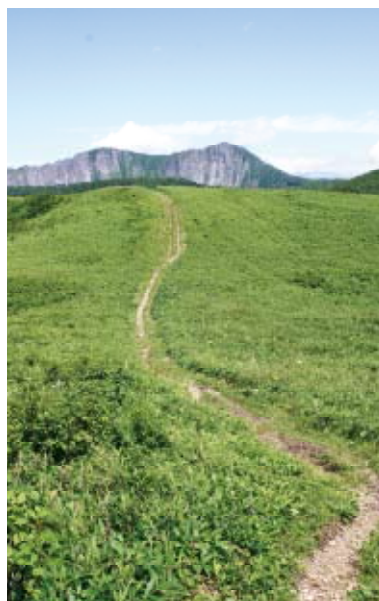
ろうが、あるがままの自然しかない摩周湖ならではの魅力とも言えよう。

霧はもちろんのこと、摩周カルデラを取り巻く大気不思議さ、美しさに魅了された人たちがいる。地元の写真愛好家たちである。個々のテーマは微妙に違うけれども、彼らは年の半分の夜明けを、幻の「第2展望台」で迎える。

町内の写真集団「グループ写真」の隅田恒示さんは、第2展望台に通う理由のひとつに「鋭角な頂の摩周岳とカムイシュ島を結ぶ線上に太陽の光が重なる」と、撮影立地の好さを挙げる。さらに北側のオホツクから忍び寄る霧と南の釧路方面から迫る霧―移入霧がぶつかり合い、湖面に降り立つ情景を目の当たりにできるのも第2展望台と言う。その瞬間、鼓動は高鳴り、カメラを持つ手は震えるそうだ。

静まり返った夜明けのわずかな時間、天と地で季節や気象条件によって刻々と変化する大気のドラマが摩周湖で始まる。

エコツーリズムの波は歴史ある観光地であった摩周湖にも現れ始めた。もともと一部の登山愛好者しか訪れることのなかった摩周カルデラの外輪山へのツアーや、満天の星と雲海に出会う旅が、地元の旅行会社で企画された。展望台から眺めるだけの摩周湖から、様々な表情を見せる摩周湖を体験し



摩周湖の南側に広がる風衝草原

Data: 摩周湖

世界一級の透明度を誇る摩周湖は300～400mの急峻な絶壁の外輪山に囲まれたカルデラ湖で、阿寒国立公園の特別保護地区に指定されている。湖面は海拔351m、周囲約20km、面積19.2km²、水深は平均146m、最大211.4m。湖への立ち入りは厳しく制限されているため、湖に通ずる道路はない。観光の利用では、第1、第3、裏摩周の三つの展望台からの眺望を楽しむのが一般的である。

写真家たちを釘づけにする

摩周湖の霧と、

風衝草原に咲く花々

摩周湖

釧路川

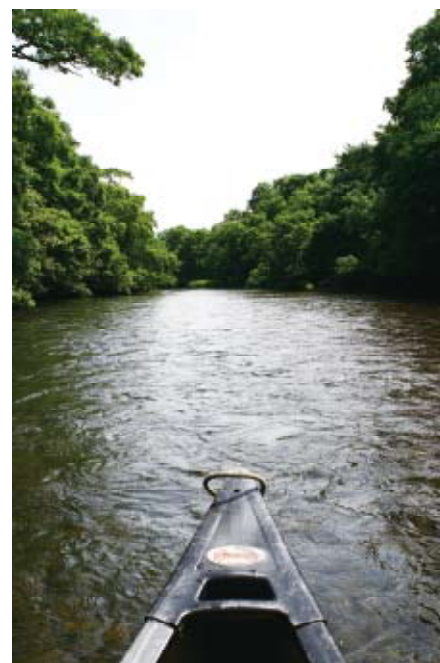


Data: 釧路川

全長154km、流域面積2510km²、流域内人口約24万人。屈斜路湖を源流に、釧路湿原を経て太平洋にそそいでいる。北海道内では十勝川に次いで、4番目に長い川である。上下流の標高差が120mしかなく、ゆったりと蛇行しながら流れる、日本ではめずらしい河川である。昭和62年に国立公園に指定された釧路湿原は、特別天然記念物のタンチョウをはじめ、貴重な動植物の生息地となっている。現在、ラムサール条約により国際的な保護のもとおかれている。



私の好きな「てしかが」の自然



屈斜路湖から流れ出す釧路川は3町1市を文字通り、曲線を描くように蛇行しながら太平洋へと辿り着く。
川のある日本の各地がそうであったように、川は昔から交通のための水路としても生きていた。釧路川も切り出した原木の流送に、生活物資の運搬に利用された。そして時には暮らしを潤す水辺として魚釣りや水浴びなど格好の遊び場としても生活に根付いていた。
しかし経済成長期、国土は大きく様変わりした。公共事業による国土開発が進んで生活は豊かになる一方で、山や海、河川の風景からは昔の自然らしさや風情が消えた。弟子屈も例外ではなく、市街地を流れる釧路川は1970年代の河川改修事業で護岸が整備され、川の流れは直線と化した。

は周遊目的の旅だけでなく、野外遊びのために訪れる人たちが増加する。カヌーによる川下りが新たなアウトドア体験、旅のスタイルとして人気を集めた。
その先鞭を付けた本が「日本の川を旅する」（野田知佑著）であり、日本のカヌーブームのさきがけとなった。カヌーがあれば川を下れる。川面から日本を再発見する、であった。山における「日本百名山」のようなバイブル的名著だ。
いまでこそ年間利用客数が1万人とも推定される釧路川源流部であるが、90年代初め頃までは一部のカヌー愛好家が訪れるだけの、知る人ぞ知る憧れの川であった。ところがカヌーを初めとするアウトドア・ブームがマスコミの知るところとなると、北海道の大自然が注目され、カヌーは格好の被写体となった。漂う雰囲気は自然そのものの、川や湖に恵まれた弟子屈町には多くの取材協力要請が舞い込んだ。

初めは役場職員が対応していたが、その数の多さに限界となり、地元のカヌー仲間が集い、ガイド会社「ノース・イースト・カヌーセンター」を設立する。その一人、中尾啓二さん

は当時を振り返り、こう切り出した。
「3日連続の番組だったけど、ロケハ、準備を含めて約1カ月かかった」。
そして仕事といえども「良い絵を撮れるなら何でもやります」と、かなり無理な注文にも応じたそう。その背景にはカヌーフィールドとしての可能性を全国に発信するチャンスと感じていたのかもしれない。
その中でも印象深かったのが、深夜全国のお茶の間に放映された「水紀行」――厳寒の釧路川・屈斜路湖を紹介する仕事だった。朴訥な語り口で有名になった作家――故立松和平氏が担当し、人気のあったニュース番組内の撮影では現地ガイドの役を務めた。それが縁で以来、立松氏と親交を結ぶようになったという。

屈斜路湖の流れ出しから20分ほどの場所に、多くのツアーガイドが案内する川の淀みがある。湧き水が浸み出し、澄んだ静かな淀みは冬季でも凍らない。通称「鏡の間」というが、この名前は、中尾さんが前出の撮影中にスタッフに乞われ、アドリブで付けたそう。

川下りがツアー商品となる前の話だが、20年前のあの頃と変わらぬ自然環境が今も釧路川源流域の魅力である。

「鏡の間」という
清らかな淀みは
今も変わらない



観光地弟子屈の看板である二つの湖―摩周湖と屈斜路湖は相反する魅力をそれぞれに放っている。両方とも火山性のカルデラ湖であるが、摩周湖が流入・流出河川がないことを特徴とすれば、屈斜路湖は釧路湿原までつながる流出河川、釧路川の源となっている点である。また一方の摩周湖が、湖面の観光利用が一切禁じられていることに対して、屈斜路湖はカヌーやヨットなどの水上スポーツ、遊漁や自然体験などさまざまな多種多様な人たちに親しまれている湖だ。

いや、人間だけではない。冬季にはシベリアからの冬の使者―白鳥が400羽を超える群れを成してやってくる。水面下に目を向けると、マス類などの魚も豊富に生息する。かたくなに人を寄せ付けない孤高の山上の湖が摩周湖ならば、屈斜路湖は暮らしの中にみるブレイグラウンドとしての楽しさ、面白さが満ち満ちた湖といえよう。

特に屈斜路湖は、釣り人にとって雄大な自然の中で大型のニジマス・アメマスが釣れるフィールドとして、90年代中頃からにわかにその存在が全国へと広がった。時を同じくしてスポーツフィッシングという釣りの形態、つまりキャッチ&リリース（※）を前提としたルールが浸透し始め



て、釣果以外の要素も注目されるようになった。素晴らしい自然環境の中に独り身を置き、糸を垂れ、魚たちとひと時の駆け引きに興じる。こうしたファンならではの愉しみの一つ一つが積み上がり、屈斜路湖をスポーツ・フィッシングのメッカへと押し上げる。

とはいえ、そこまでの道のりは長く険しかった。1938年に屈斜路湖の湖底で起こった噴火により、酸性化した湖水は魚が生息できない環境となった。それから50年、80年代中期からは水質が徐々に中性化して、町の放流事業の成果もあり、魚の生息が確認されるようになる。しかし復興したと言っても、もともと流入河川が少ない湖で自然再生産には限界がある。町独自の放流事業だけでは、漁獲を目的とした釣り人たちや産卵期の河川での釣りなどにより、せっかく回復した魚が減少、特に人気のあるニジマス・アメマスなどは激減したという。

この状況に危機感を持った地元元の釣り人たちは、98年に任意の釣り団体を組織するなどして広く寄付金を募り、稚魚を放流する活動を始めると同時に限られた資源の保護や自然環境の重要性を訴えて、ルールづくりとマナー向上にも力を入れた。それらの活動は

釣り雑誌の全国版でも取り上げられ、屈斜路湖におけるスポーツフィッシングに関する意識を周知、共有できる場となった。

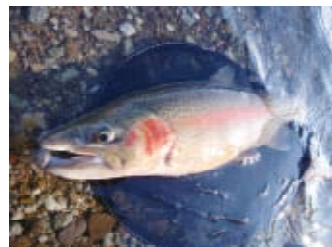
こういった地道な努力によって、少しずつではあるが、町外から訪れる釣り人たちにも屈斜路湖における釣りのルール&マナーが浸透しつつある。現在でも魚の放流は続けられているが、究極の目標はやはり放流に頼らない自然再生産による魚資源保全の実現である。屈斜路湖で生まれ育ち、厳しい生存競争に打ち勝った野性味あふれる魚が増えることを願い、今では町や釣り団体が協働し、産卵期における流入河川での釣り自粛等、様々な啓発活動を通して種川の保護に取り組んでいる。

ボツンと半身を湖面に現した釣り人の思いの先にあるものは、まだ見ぬ大物の姿か、あるいは湖で育った自然の息吹なのか。自然とひとつになる時間、それがスポーツフィッシングの醍醐味なのかもしれない。



Data: 屈斜路湖

日本最大の屈斜路カルデラは、周囲 57km、面積 79.6km²、国内で 6 番目に大きい湖である。夏季は釣りや水上スポーツのほか、キャンプや露天風呂を楽しむ人々などで賑わう。冬季は全面結氷するが、地熱が高い砂湯地区では毎年 400 ～ 500 羽の白鳥が解氷したわずかな湖面で越冬する姿が見られる。厳冬期には、氷の膨張と収縮で起こる「御神渡り現象」と呼ばれる氷の造形が生まれる。そのスケールは、時には長さ 10km、高さ 2m に及ぶこともある。



※キャッチ・アンド・リリースとは、釣り上げた魚を漁獲として扱わず、川や湖など元の環境に再放流、返す行為を指す。

長い年月をかけて回復した 魚たちの未来を守る



屈斜路湖

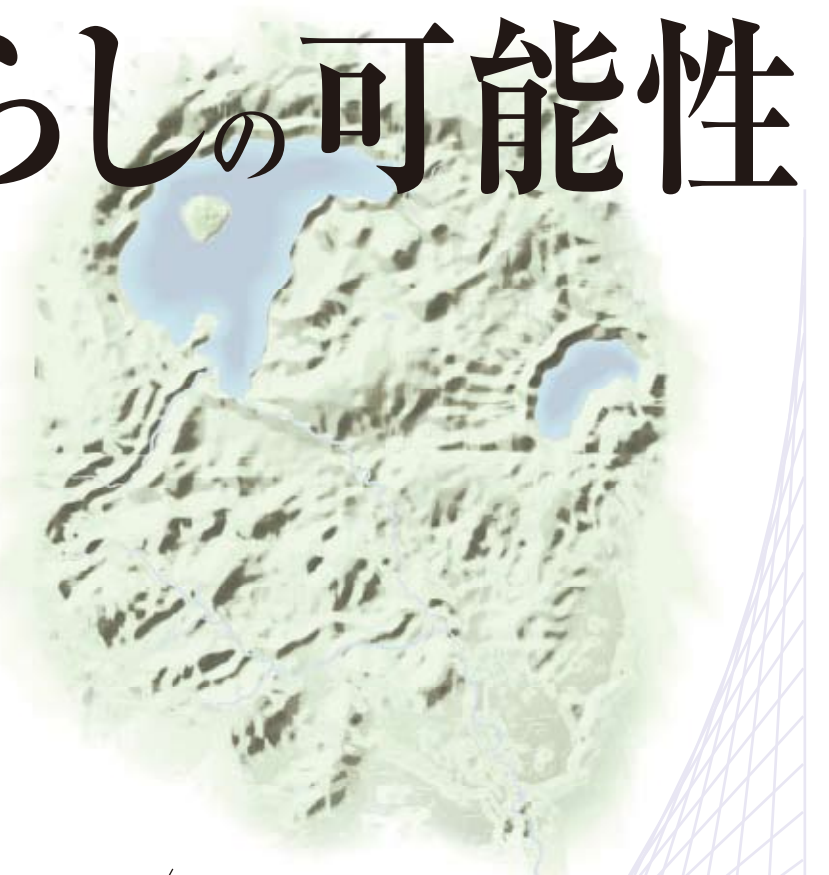


高速インターネット環境がもたらす 田舎暮らしの可能性



社 会基盤と訳されることが多いインフラ (infrastructure) に通信基盤が加わって久しい。電信・電話に始まった通信インフラは携帯電話、インターネットに移行してもまだ進化を続けている。

携帯電話の中継基地はまるで酪農地帯のランドマークのように鉄塔が建ち、作業中のトラクターから世界へとつながる。インターネットにしてもそのサードは飛躍的に向上、通信速度を表す単位はキロ (K) からメガ (M) に変化した。といってもこれは一般論であって、人



口密度の高い都市部でインフラの整備もたやすい地域での事情だ。本町の市街地から遠く自然豊かな地域には、たとえ利用者のニーズがあったとしても通信基盤を整備するだけの「費用対効果」―採算性を望めない状況であった。一部、町内中心市街地では都市部同様のサービスが拡充されたが、格差は依然として残った。

しかし降臨とでも言おうか、平成23年7月の地上デジタル放送への完全移行に伴い、同年3月には本町のほぼ全域で高速インターネット網が整備された。

こうした通信インフラの充実、地域産業での活用はもとより、移住促進や企業誘致などにもプラスの効果が期待される。

平成21年に移住した松谷保宣さんの前職は機械のセールス・エンジニアだ。今も以前の会社と契約し、インターネットを利用して自らが設計した生産設備の図面の修正やアドバイスなどを行っている。

「企業では光やブロードバンドは当たり前で、サイズの大きさを考えずに送ってくる。なかには400MB (※) でも普通に通って来る」

そう話す松谷さんは、図面や写真などの大量のデータを受けるため、いまは市街地に住んでいるが、近い将来は自然に囲まれた環境に家を建て、これまで通り仕事を続けたいという。

美留和在住でIT技術者の養成アドバイザーを生業とする水岡祥二さんによれば、ネットワーク環境が整備されるまでに10年のタイムラグがあったそうだ。けれども都市部と遜色のない高速のインターネット環境ができたことによる可能性をこう続ける。



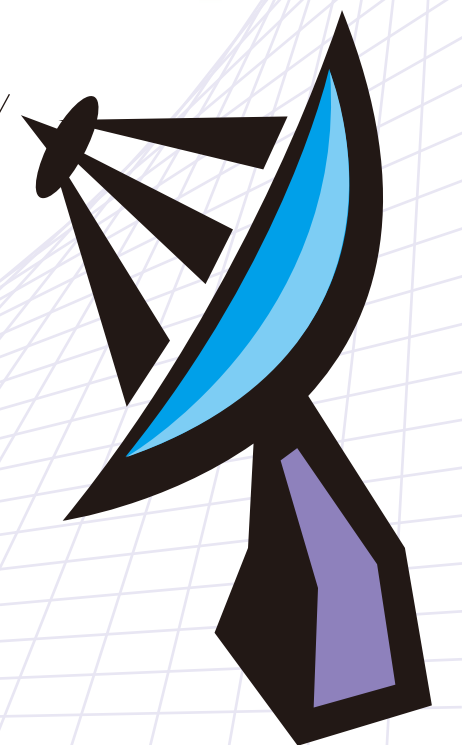
ラフなスタイルでパソコンに向かう松谷さん

建築士や設計者など図面を媒体に仕事を行う職種なら弟子屈でも仕事はできる。「テレビ会議システム」を利用すれば、遠隔地というハンディは解消されるし、経費も抑えられる。過去にもあったシステムだが、高速ネット環境になったことで「画像が動画となり、フェイス・トゥ・フェイス」のリアル会議が可能になるといえる。

「インターネットは時と場所を選ばない」。一昔前に流行ったキャッチコピーが、緑豊かな弟子屈の森の中でも現実のものになる。

Network

※一般に新聞1ページの情報量が50KB (0.05MB) と言われるから、40ページの朝刊で換算すると0.05MB × 40 = 2MB。つまり400MBとは朝刊200日分の情報量となる。



弟子屈の医療を支える施設



JA北海道厚生連摩周厚生病院



布施医院



美里クリニック



川湯の森病院



弟子屈クリニック

「私は地域の医者であるのと同時に、地域住民でもあるわけです。だから自分が介護を受ける立場になった時のことを考えて、これなら自分も入りたいという

介護事業にも、 地域を活性化する 可能性はある

往診や訪問診療にも出向き、まさに町医者として地域の生活を考える一方で、北海道における地域医療のネットワークづくりにも尽力してきた。

開業間もない1995年には、過疎地の地域医療に熱意を持って取り組もうとする医師を相互サポートするための「北海道地域医療研究会」を立ち上げた。それは地域医療の重大な柱の一つが継続性であり、過疎地域で踏ん張る医師を孤立させず、また最終的にリタイアする時のためには後継者の育成も必要だと、自らの経験を通して痛感したからだだった。

温泉があり国立公園の景観にも恵まれた弟子屈で、高齢者にも住みやすい空間を提供すれば、福祉好例の町として都会からの移住者が増える。それにともなっ

場を作ろうと思いました」この10年間、介護分野にも力を入れてきたきっかけを、行木先生はこう語る。

介護保険制度がはじまった2000年にはデイケアセンター「たこ八」を、そして2004年にはグループホーム「あったか家」、2010年にグループホーム「家路」を次々に開設し、併せて訪問リハビリや訪問介護も行なっている。

クリニックの仕事以外に、デイケアセンターやグループホームのお年寄りたちを診回る毎日には多忙を極める。しかし「買物に行けない高齢者への介護サービスや、一人でも安心して暮らせる空間づくりなどまだやるべきことがあるし、医療介護の領域は事業としての可能性もまだまだある」と行木先生はいう。

て地元での雇用も増え、仕事がないために弟子屈を出ていった若者のUターンにもつながるのではないかと、というのだ。

それは、弟子屈クリニックを開業した時に6人だったスタッフが、介護事業が広がったことで現在約60人にまで増えているという事実を踏まえた上での、弟子屈町への提言でもあるかもしれない。



弟子屈の福祉を支える各種施設



グループホーム家路



グループホームあったか家



デイケアセンターたこ八



弟子屈

子屈町の主だった医療機関は、現在2つの病院と3つの診療所で成り立っている。

その1つ、開業18年目の弟子屈クリニックには、1カ月に延患者数1200人以上が訪れる。院長の行木紘一先生は、国立療養所名寄病院や厚岸町立病院での勤務を含めると、30年以上も北海道の地域医療に携わってきた。

多くの田舎がそうであるように、人口約7900人弱の弟子屈町でも、病院にすべての科を設けそれぞれ専門の医師やスタッフを置くのは財政上不可能なことだ。また、夜間の受け入れに対応できるのが病院1カ所のみ、という意味でも医療過疎地といわざるをえない。

だがそんな地域だからこそ、総合医、家庭医としての医師の役割は大きい、と行木先生は言う。

さらに「地域の医療ニーズを考える時、都市部の病院などで専門的な高次医療を受けるのが必要な患者さんは、実際には人口1000人当りで約10人、つまり1%程度。それ以外は地域の家庭医の治療やアドバイスで、ほとんどの病状は安定し、治っている」と、有名な統計を引用しながら説明する。

家庭医とは、患者に配慮した適切な治療やアドバイスを提供し、必要に応じては専門医と連携して治療やケアにあたる医師のこと。地域に根ざし、患者を一人の人間として総合的に診ることから、「何でも診る専門医」と呼ばれることもあるそうだ。

行木先生は病院に來られない高齢者の

地域医療を ここで 実践する。



●なめき こういち／1941年生まれ、千葉県出身。「ドクトルマンボウ」の船医、北京の日本大使館医務官などを経て、北海道の国立療養所名寄病院、厚岸町立病院に勤務。1993年弟子屈町で弟子屈クリニックを開業し、2000年介護保険制度スタートと同時にデイケアセンターを開設する。

行木
紘一

※平成27年3月開設予定



養護老人ホーム俣和園
／特別養護老人ホーム摩周



弟子屈町デイサービスセンター



Conference



■H24年10月開催エコツーリズム大会



■H25年/温泉街部会事業 温泉川清掃の様子



■H25年観光塾の様子

以来、生まれ変わったように地域が動き出した。なにより地域住民が主役なのだ。住民であれば誰でも参加でき、個々の意見を地域づくりに反映できる場が、「えこまち協議会」の核であるからだ。

観光を機軸とした取り組みであるが、地域づくりの原動力となる住民はもとより、商工業・農業など様々な産業と連携しつつ包括的な総合産業化を目指す過程で生まれ出る、地域経済の活性化が地域づくり、ひいては観光地の魅力づくりに役立つという。

いわく「これからの観光は、地域の魅力づくり（＝お客さまが弟子屈へ来る明確な理由と目的）、そして地域全体で満足させて帰ってもらうための『地域力』が大切」である。

その『地域力』の実現にむけて、8つからなる専門部会がそれぞれ独自に、時には連携して、多彩な事業展開を行っている。アイデアを出し合い活発な議論を重ねながら「誰もが自慢し、誰もが誇れるまち」を目指し、日々精力的な取り組みを続けている。

平成21年度には地域密着型旅行業者「株ツーリズムてしかが」を設立するなどして、自然環境に配慮したエコツアーなどのプログラムを実施してきた。それらの取り組みが実を結び、平成23年度には第7回エコツーリズム大賞の優秀賞を受賞した。

これほど広範囲で活動する住民が「地域づくり」という共通目的の元に結集するということは、おそらく全国の市町村の中でも稀なケースではないだろうか。言い換えれば、それだけ弟子屈町の「えこまち協議会」を構成する住民パワーが本気であるという証左なのかもしれない。

新たな観光を 創造する「地域力」



POWER

全体事業

平成25年度てしかが観光塾／弟子屈高校観光甲子園事業／てしかがなび（HP）運営／弟子屈野外活動スキルアップ講習会／街コン開催（ユースフルネットワーク弟子屈と共催）／地域の宝探し事業（てしかがきらりスポット）／温泉川清掃／コンシェルジュ養成講座／地場産品の活用実態調査／弟子屈極寒アートフェスティバル2014実施

- エコツーリズム推進部会** 町内のエコツーリズムでの地域振興を進める部会
- 情報部会** てしかが観光ポータルサイトを通じて、さまざまな情報を発信する部会
- 女性部会** 女性の視点での地域振興を進める部会
- 人財育成部会** 地域の観光分野における人財を育成する部会
- 食・文化部会** 地域の食文化の研究や地域食材のPRなどを進める部会
- 環境・温泉部会** 地域の環境保全や温泉に関する取り組みを進める部会
- UD部会** 地域のユニバーサルデザインを進める部会
- A&A部会** 芸術による地域振興を進める部会

そんな中だった。「誰もが自慢し、誰もが誇れる町づくり」をスローガンに地域全体を取り込んだ組織「てしかがえこまち推進協議会」（※以下、えこまち協議会）が発足したのは――平成20年の冬のことだ。

きっかけは国土交通省の認定する「観光カリスマ」の山田桂一郎氏による「自然と共生した観光リゾート地域とは」と題された講演会。地域経済が縮小する状況や全国で観光を重視する動きなど様々なデータを駆使した話に会場に集まった聴衆の気持ちはひとつになった。そして講演後、行政や商工会、旅館組合や観光事業者らが中心となり、地域再生に取り組みたいと協議し、山田氏へ助言を求めたことに始まる。

周湖と屈斜路湖を擁する阿寒国立公園に囲まれた自然と、昔から湯治場として栄え温泉に恵まれた弟子屈は、道東を代表する観光地である。観光関連の仕事に就く住民も多く、農業と並ぶ基幹産業として長年地域経済を牽引してきた。

ところが、近年観光客が来ない。宿泊客数を例にすると、バブル期の終末―平成3年の73万4千人をピークにその後は減少の二途を辿り、平成25年には26万人へと大幅に減ってしまった。出口の見えない不況で経済が低迷している、団体から個人への旅行形態に対応できなかった、地域PRが不足していたなどなど、これまでも分析の結果は多々あったが、誰も衰退を止めることが出来なかった。

摩

公園に囲まれた自然と、昔から湯治場として栄え温泉に恵まれた弟子屈は、道東を代表する観光地である。観光関連の仕事に就く住民も多く、農業と並ぶ基幹産業として長年地域経済を牽引してきた。

●わたなべ たかゆき／1962年生まれ。酪農家2代目として家業を継承しながら、北海道初の酪農教育ファームに認証された「渡辺体験牧場」を経営する。海外からの観光客も多く、乳しぼりや大草原周遊などが人気メニューだ。オリジナル牛乳「牛のおっぱいミルク」は町内限定販売。

渡辺隆幸

育てる。

牧場体験者の声が、
「牛のおっぱいミルク」の生みの親。



「牛」と触れあい、酪農作業やアイスクリームづくりが体験できる「渡辺体験牧場」には、国内外から年間3万人の観光客が訪れている。

この体験牧場の生みの親、渡辺隆幸さんが自分の牧場を酪農体験の場にしようと考えたきっかけは、およそ25年前、近所のユースホステルの宿泊客にアルバイトの声をかけたことからはじまる。

当時はまだ保存用の草をコンパクトと呼ばれる直方体の乾草にしていたため、雨にあてないように短時間で倉庫に収納するには、その時だけ人手が必要だった。

農作業の手伝いをしてくれた人々から、「ここは良い所だね。牛つて可愛いね」という言葉を聞くたびに、渡辺さんは自分が生まれ育った環境を改めて見直すようになっていったという。

やがて機械化が進み人手は不要になしたが、有料でも酪農体験をしたいという観光客は増え続けた。それに目をつけた旅行会社からツアーに組み入れたいとの依頼があり、乳しぼりやエサやり、広大な牧草地の周遊などの体験メニューをつくり、受け入れ施



「牛」と触れあい、酪農作業やアイスクリームづくりが体験できる「渡辺体験牧場」には、国内外から年間3万人の観光客が訪れている。

この体験牧場の生みの親、渡辺隆幸さんが自分の牧場を酪農体験の場にしようと考えたきっかけは、およそ25年前、近所のユースホステルの宿泊客にアルバイトの声をかけたことからはじまる。

当時はまだ保存用の草をコンパクトと呼ばれる直方体の乾草にしていたため、雨にあてないように短時間で倉庫に収納するには、その時だけ人手が必要だった。

農作業の手伝いをしてくれた人々から、「ここは良い所だね。牛つて可愛いね」という言葉を聞くたびに、渡辺さんは自分が生まれ育った環境を改めて見直すようになっていったという。

やがて機械化が進み人手は不要になしたが、有料でも酪農体験をしたいという観光客は増え続けた。それに目をつけた旅行会社からツアーに組み入れたいとの依頼があり、乳しぼりやエサやり、広大な牧草地の周遊などの体験メニューをつくり、受け入れ施



農業が指し示す「てしかが」の逸品

特産品を

猪狩広昭

●いかり ひろあき／1964年、弟子屈町川湯生まれ。農家の3代目としてじゃがいも、ビート、小麦などを生産する一方、2000年には摩周そば生産組合長に就任。当初は畑作の代用作物に栽培されたそばだったが、現在はそば通の間で“摩周そば”として高い評価を得ている。摩周そばを原料にした乾めん、そば焼酎、そばまんじゅうなども好評発売中。



ソバ名人をうならせた
青い実が、

生産者魂に火をつけた。



北海道は全国の作付面積の3割を占める、そばの主要生産地である。ここ弟子屈町でも2000年に摩周そば生産組合が結成され、本格的なそば栽培がはじまった。

結成から組合長として生産農家の中心になってきた猪狩広昭さんは、摩周そばの特長を「他に比べると青味が長持ちして、風味や香りが良い」とことだという。そしてその特長こそが、そばのプロから高い評価を受けている理由でもある。

そばの皮を剥いた実は、新しいもののほど緑味が強く、収穫から時間が経つにつれて茶っぽく変色していく。つまり鮮度を表わす緑味が持続するということは、品質が劣化しにくいことを示している。

だが栽培当初、摩周そばの評判はあまり芳しいものではなかったらしい。川湯、屈斜路地区に集中するそば畑が火山灰土壌のため、収穫時に混じる軽石が商品価値を下げていた、というのだ。厄介物の軽石を除去する石取り機を導入し、やっと商品として認められるようになった頃、あるきっかけから、弟子屈のそばが、平成のそば打ち名人、高橋邦弘さんの手に渡った。

長年そば打ちにかかわり、多くの弟子も育てた高橋さんを、その輝くような緑色のそばの実は「こんな良いものが北海道にもあったのか」と、うならせたという。

それを知った猪狩さんたち生産農家と「A摩周湖の担当者」は、それまでは収穫量を増やすことを考えてきたけど、どうせやるなら売れるもの、評価されるものを」と発奮し、摩周そばをブランド化することにした。2003年のことである。

しかしブランドを名乗るには、他との差別化をはかり、より良いものをつくらなくてはならない。猪狩さんたちはまず栽培方法を研究するために、畑ごとに収穫したサンプルできめ細かな履歴を取った。すると雨に当たったそばは確実に味が落ちることがわかり、徹底した「雨前収穫」をし、種を播く時期もきちんと揃えることにした。

また畑ごとのそばについて、それぞれの味の違いをユザーから聞くだけではなく、生産者自らも食べ比べ意見を出し合った。収穫物の出来具合がストリートにわかることで、農家同士を結束させる一方、良い意味でのライバル心も生んだようだ。

「高橋名人からは、摩周そばのすべてが良いとは言われていない。つくって欲しいといわれるそばをつくるにはどうしたらいいか。去年みたいな悪条件の天気でも、やっぱり摩周そばは「一番良いと言われた」と、猪狩さんが見せてくれたのは、前年(2009年)の収穫からすでに10カ月経つても、まだ緑味が残るそばの実だった。



新そば祭りにて—前列右から3番目が猪狩さん、5番目が高橋名人

設も充実させ、渡辺さんは北海道で初めての体験牧場を誕生させた。

「牛を見た途端、みんなその大きさに『オーッ』と驚くし、草原に行ったらまず広さに感激する。体験することで農業を垣間見て、自分達がいつも肉や牛乳を食べられるのは、牛ががんばってくれているおかげだってわかるようだ」

そんな体験者の反応は、牧場のオリジナル牛乳「牛のおっぱいミルク」を生産することにもつながった。地元の牛乳のほとんどが加工乳に回される中で、自分の牧場でしぼった牛乳をそのまま味わってもらいたいと思うようになったからだ。

2008年から体験施設の隣に建てた工場で生産される「牛のおっぱいミルク」は、牧場内の店舗をはじめ、町内の摩周湖や硫黄山のレストハウス、Aコープなどで販売され、年間700万円を売り上げる人気商品になっている。

「体験するのは牛とのふれあいだけど、目指しているのは人とのコミュニケーション。お客さんが喜んでくれるとうれしいし、一緒に働くスタッフや家族とも会話ができて、この仕事をさせてくれた親や兄弟にも感謝している」

体験牧場も「牛のおっぱいミルク」も自然な流れの中から生まれたことだと渡辺さんはいうが、人と触れあい、弟子屈の良さを再確認することで、酪農の新たなビジネスチャンスが広がったのではないだろうか。



profile

●よこやま ひろし／1939 年横浜市生まれ。63 年東京総合写真専門学校卒。教務課助手を経てフリーに。以後、山岳写真、スキー写真の分野からネイチャーフォトの世界へ。この 20 年、道東の自然をライフワークとして取り組む。2008 年摩周湖の環境保全イベントに合わせて開催した個展「魅惑の四季」と、09 年 4 月から 1 年間北海道新聞根室・釧路版夕刊に 40 回連載したフォトエッセイはその成果をまとめたものとして注目を浴びる。著書、写真集に「立山」(時事通信社)、「トップスキーヤー」(スキージャーナル社)、「自然のこころ」「スキーのこころ」2 部作、「横山宏のネイチャーフォト講座」(山と溪谷社)等。弟子屈町川湯駅前在住。

写真家・横山宏

夢の大地

先日、久しぶりに上京した。用足しの合間に生まれ故郷の横浜や電気街の秋葉原、銀座などに出歩くのも楽しみのひとつ。ところがそんな気分はアツという間に打ちくだかれてしまった。どこへ行っても溢れる人と車、さらに量販店に入れば多彩色どりの商品がこれでもかと言わんばかりに陳列され、ボリュームを上げた BGM が鳴り響く。東京に住んでいた頃には気にもとめなかったことが、今は苦痛に感じてしまう。早く用を済ませ、静かな川湯に戻りたいと願うばかりであった。

多感な少年時代に憧れ、夢にまで見た北の大地。写真家となった私はそのベースを縁あって川湯とした。今思えば、20 年程前のことであった。その流れの中でいつしか川湯の人となり、都会は異次元の世界のようになっていたのだ。

阿寒国立公園エリアの要衝ともいえる川上郡弟子屈町。本州の人に「今どこに居るのか?」と問われた時にこの地名だけを言うと「それは日本のどこ?」と聞かれる。そこですかさず「摩周湖の山裾で広大な屈斜路カルデラの中。私が住む川湯駅前は大横綱、大鵬の実家がある川湯温泉の近くにだよ」と答えると、皆、一様に「わあ、いいなあ。そんな所に住んで好きな写真が撮れて」と言われる。

確かにその通り、玄関を出れば目の前に噴煙なびく硫黄山、車で数十分走れば摩周湖や藻琴山の展望台、美幌峠や津別峠も手のうちだ。さらに走れば阿寒や根室、知床や網走など、写真愛好家ならよだれが垂れるような撮影ポイントへ足を延ばすことも可能だ。写し、走り回って川湯に戻れば天下の名湯が私を癒してくれる。こんなロケーションのすばらしい所は、日本中探してもそういくつもないだろう。

ともあれ、その環境に身を置くことが出来る私は幸せ者である。弟子屈町内だけでも私の限られた人生では写しきれない魅力的な被写体が存在する。特に四季折々に自然が放つ稀なる現象は神秘と幻想に満ち溢れ、私を魅了する。写しても写しても、もうこれで良い、というところに辿りつかない。

だからいつも思う。もし生まれ変われることが出来たなら、今度は子供の時から川湯に住み、さらに写し続けたいと。他には何もいらぬ。少年の頃憧れた北の大地は、時空を越えても、私にとって永遠の夢の大地のままなのである。

2010 年 4 月中旬、春の風が吹きすさんだ屈斜路湖に、オホーツク海や根室海峡で稀に見られる流氷山脈のような現象の氷山が突然出現した。湖面に漂っていた氷が湖畔に打ち寄せられ隆起したのだ。所用で東京に行く前日、私は幸運にもこの現象に遭遇し、写しとめることが出来た。

もつと気軽に 音楽会を楽しんでほしい。

●弟子屈は個性的な移住者が多い町だ。その中でも「元宝塚歌劇団花組」の経歴を持つ藤原多美さんは、ひとときユニークな存在といえるだろう。

「宝塚退団後に、田舎で犬を飼いながらできる仕事と考えると、ペンションぐらいしかならなかつた」という多美さんだが、小学生の頃から目指していたのはピアノで、高校卒業まではクラシック音楽漬けの毎日だったようだ。

常に音楽とともに歩んできた多美さんを象徴するように、開放的な景色が広がるペンションのラウンジにはグランドピアノが置かれている。実はここで2006年のオープン以来、年に数回、クラシックコンサートが開かれている。



屈斜路 ●「宿・花ふらり」経営

藤原光政さん、朋子さん、多美さん

プロの演奏家やプロを目指す学生による本格的なクラシックコンサートが、小さな町のペンションで催されるというのは珍しい。しかも格安な入場料なので、毎回、根室や帯広、北見などからもファンが訪れ、定員45人ほどの会場はすぐに満員になってしまう。大きな窓から雲の動きや風の流れを感じながら、音楽家と観客が一体となる臨場感は、大きなコンサートホールでは決して味わえないものだ。

「自分たちも楽しみたいし、地元の人にもっとクラシック音楽を楽しんでもらいたい」という多美さんと、裏方としてサポートする父の光政さんや母の朋子さん、他にも町内で協力者がいるそうだが、さて次はどんな演奏会が開かれるのだろうか。

●ふじわら たみ／京都府出身。クラシックのピアニストを目指していたが、音楽学校卒業後は宝塚歌劇団に。退団後、北海道でペンションを運営したいと思い立ち2006年にオープン。両親、愛犬たちとともに暮らす。

タンチョウを育む 自然を撮りたくて退職、 移住を決意しました。

●現在59歳の中島浩さんが、妻の陽子さんと弟子屈に移住したのは9年前。

それまでも道東には、忙しい仕事の合間をぬってひんばんにタンチョウの撮影旅行に訪れていた。特に田舎暮らしがしたかったわけではない中島さんだが、旅行中にたまたま見かけた温泉付分譲地のチラシに心が動いた。

「写真を撮るなら、こういう所に住みたい。定年まで勤めて、身体がきかなくなつてからは遅過ぎる」と思い、早期退職。温泉と静かな所が好きな陽子さんもそれに同意した。



熊牛原野 ●アマチュア写真家

中島浩さん、陽子さん

●なかじま ひろし／埼玉県出身。タンチョウの撮影で通ううち、この地に魅せられ温泉付の土地を購入、2001年に妻と移住。自宅の一角にある写真ギャラリーは、地元の撮影仲間や訪問客との交流の場にもなっている。

移り住んだその年、家の前の牧草地にタンチョウが降り立ったのには二人とも驚いたという。それまでは特別な撮影対象だったタンチョウが、ごく身近な日常として姿をあらわしたのでから無理もない。他にもキツネやエゾシカ、エゾユキウサギなどがやってくる。

タンチョウだけではなく、四季折々の自然をテーマに写真を撮る中島さんだが、「何年たっても、冬が一番好きなのは変わらない」と言う。その理由は、冬は自然現象にいろいろな変化があつて、冷えれば冷えるほど撮影の題材が増えるから、だそう。

こちらに来て知り合った撮影仲間とは、自宅のギャラリーに作品を持ち寄り、月1回ペースで例会を開いている。「言いたい放題」の刺激的、かつ和気あいあいとした勉強会のような。陽子さん近所の人から山菜の食べ方や牛乳豆腐の作り方を教わったり、ミニテニスやゲートボールなどのサークルに参加しながら、マイペースで弟子屈ライフを楽しんでいる。

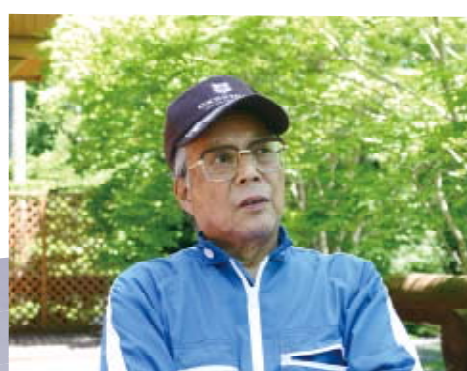
NEW FACE, NEW RESIDENTS

..... 新しい顔・新しい町民

●福岡県出身の小川秀夫さんは、長年九州や神奈川県で、アトピー性皮膚炎をはじめとする難治性疾患の温泉湯治療法に関わってきた人だ。

それは約30年前、薬を飲めば飲むほど悪化する一方だった妻の膠原病が、温泉に入つた時だけ容態が安定するのに気づき、積極的な温泉入浴を勧めて病気を完治させたことからはじまったそう。

以来、どんな病気の治療にも、薬物に依存する対処療法ではなく、身体を温め養生して自然治癒力を高める「湯治療法」を提唱・実践してきた。



南弟子屈 ●「フォレストイン摩周苑」経営 小川秀夫さん

そんな小川さんが、弟子屈の広大な原生林に宿泊施設用のログハウスを建てたのは、「このフィールドは究極だから、ガン患者の癒しの場にしようと考えた」からだ。

不治の病と思われているガンも、まだ体力のある段階なら、日に数回のぬるま湯入浴と生活を改善することで治すことができる、と小川さんは考えている。

「この見事な自然環境と豊富な温泉を利用すれば、この町は医療費節減、健康宣言の町として全国にもアピールできる」と、自らの研究データを引用しながら熱く語ってくれた。

●おがわ ひでお／1939年生まれ、福岡県出身。妻の病気がきっかけで温泉湯治による自然免疫療法の研究をはじめ。2003年、弟子屈に「フォレストイン摩周苑」を建設し、ガン患者の救済を目指す。著書も多数。

温泉療法のパワーは 弟子屈の宝になると思う。

●20代の頃から国内外を旅してきた中野孝之さんは、「広くて山があり、大きな湖や川もある。そんな景色が好き」という理由で、弟子屈を定住の地を選んだ。

2009年5月に弟子屈で結婚したさやかさんとは、ニュージーランド滞在中に知り合った。二人とも自然が好きで、ことから、「日本に帰国したら、緑があつて人が少ない所で暮らしたい」と新生活への夢を膨らませ、それが弟子屈移住につながったそう。

実は中野さんは、5年ほど前に弟子屈で暮らしたことがある。建築について学べる職業訓練校が釧路にあつたため弟子屈から通つたのだが、約10カ月間暮らしな

湯の島 ●酪農業手伝い／看護師 中野孝之さん、さやかさん



●なかの たかゆき／1975年生まれ、広島県出身。会社員をした後、国内や海外で放浪の旅を経験する。2008年にニュージーランドから帰国後、弟子屈へ移住。2010年10月には第一子が誕生する予定。

がら「ここは将来住む町の候補になる」とすでに感じていたらしい。

最初の滞在で多少の知り合いもあったおかげで、移住後はすぐに牛の削蹄の仕事が見つかった。さらに仕事で酪農家を回るうちに搾乳のアルバイトも頼まれる、といったように、人とのつながりが出来るにつれ、中野さんはもつといろいろなことに挑戦したいと考えるようになった。

訪問看護師として働く妻のさやかさんも、以前大阪にいた時に比べて、人や物が少ない分それに煩わされないの時間で時間に余裕が出来たという。

弟子屈の暮らしにそれぞれ手応えを感じながら、「いずれは土地を買って、動物を飼ったり野菜を作って自給自足できる暮らし」に向い、中野さんたちは一歩を踏み出した。

海外はあちこち旅したけれど 定住を意識したのは ここ弟子屈だけです。



長年の夢は 森の中でペンション経営だった。

●静かな森の中でペンションを経営する久郷岳彦さんは、旭川から家族とともに移り住んで2年、ようやく地域の暮らしにも慣れてきたところだ。

10年ぐらいい前から毎年キャンプで道東に通ううちに、「こういう所で、人生が過せたらいいな」と思うようになり、新しい土地での生業として宿屋業を選んだという。前職が司法書士だったことを考えると、仕事もまったく未知へのチャレンジだった。

夫の突然の話に最初は戸惑ったものの、料理屋で修行しながらペンション開業に備えた妻の百合子さんは、弟子屈での暮らしをこう語る。

「朝、鳥が来るのを見ているだけでも安らぐし、仕事はたくさんあるけど気持ちに余裕ができた気がします。慣れていないので接客もまだまだ難しいですけど、気負わず自然体でやれば良いと思う」。その言葉に同意するように久郷さんも大きくうなずいた。

現在長女の愛実さんは旭川の祖母の家から高校に通い、長男の天就（たかなり）君は地元中学に通いサッカー少年団で活躍している。



●くごう たけひこ／1959年生まれ、旭川出身。旅行やアウトドアが好きで、いつかは自然の中で暮らしたいと願うようになる。家族を説得して2008年に移住、現在はペンションオーナーとして奮闘中。

美留和 ●「きらの宿・すばる」経営
久郷岳彦さん、百合子さん、天就君

..... 新しい顔・新しい町民



●岡本義徳さんによれば、岡本家には、「厄年には散財せよ」という言い伝えがあるそうだ。厄除けのために、蓄えたものを散財して「から出直さない」という意味らしいが、岡本さんにとつての散財とは「家」だった。

場所は特定せず、インターネットで日本の中古住宅を探すうちに見つけたのが、現在住んでいる家。それまで弟子屈には来たこともなかったが、家を取り巻く自然豊かな環境もひと目で気に入り移住を決めたという。

2007年12月にまず岡本さんが、そして移住を機に結婚した妻の葉子さんも翌年春には名古屋から移り住み、まさに「ここでの新生活がスタートした」。「ここで生活するためには、地域の人のちのつきあいも大切したい」と、移住当初から地域活動にも積極的に参加する彼らに、人々はなにかと声をかけてくれた。そんな結びつきが、就職情報の提供にもつながったのだらう。

岡本さんは、近所で起きた火事の後片付けを手伝ったのがきっかけでJA摩周湖の職員に、葉子さんは弟子屈中学校の臨時職員として勤務している。

「町営牧場の仕事は牛の世話だけでなく、土木、建築、車の整備までいろんなことが勉強できるし、自然の中では生きるための知恵も必要です。弟子屈での生活は自分を変える良いチャンスになった」と、日焼けした顔をほころばせる岡本さんだ。

奥春別 ●JA摩周湖職員
岡本義徳さん 葉子さん

地域とのつながりが、
結果的には「就活」となった。

●おかもと よしのり／1965年生まれ。名古屋で運送会社を経営していたが、厄年を迎えて心機一転、2007年に移住を決意する。現在はJA摩周湖の牧場管理係の職員として、町営牧場で働く。

注)ご紹介した移住者の方の情報は、2010年当時のものです。

《新しい顔、新しい町民になるための移住施策の概要》 (平成26年度)

移住体験ツアー

弟子屈町では、移住希望者を対象とした「移住体験ツアー」を実施しています。

夏と冬では全く異なる自然環境や道路状況をはじめ、日々の暮らしに欠かせない商店や病院、学校のことまで、生活全般に関する

「知りたいところ」を見学・体験します。旅行で訪れていた時とは違う、生活者の視点で弟子屈町の生活環境を見て、聞いて、体験して不安を解消するツアーです。



《参加者の声》

- 先輩移住者のお宅を訪問し、窓から眺める大自然の景色、自宅にある露天風呂を見て改めて自然の中でのんびり暮らすことの素晴らしさを実感できた。
- このツアーでしかできない冬の生活体験（除雪・スノーシュートレッキング）は北海道の冬の楽しさ、厳しさ、大変さを肌で感じられて、とても参考になった。

体験メニュー

先輩移住者お宅訪問 / 道外から移住された方のお宅を訪問、経験者ならではのお話を聞けます。

北海道住宅見学 / 寒さに強い北海道の住宅を専門家の解説付きで見学します。

移住地見学 / 町内各地に点在する移住地をご案内します。

交流会 / お酒を飲みながら、地元の方と交流を深める貴重な機会です。

町内生活関連施設見学 / 医療機関（病院）、スーパーを見学します。

除雪体験 / スコップ、スノーダンプなどを手に取り実際に除雪作業を体験します。（冬季のみ）

冬道運転体験 / 特設コースでアイスパーン、わだちなどの冬道路面を運転体験します。（冬季のみ）

スノーシュートレッキング体験 / スノーシュー（カンジキ）を履いて原生林を散策、雪国ならではの冬の楽しみ方を紹介します。（冬季のみ）

北海道の東に位置する弟子屈町は、昔から摩周湖と屈斜路湖に代表される雄大な自然と、湯治の里として栄えた豊富な温泉郷を有する観光の町として有名です。近年では、そんな恵まれた自然環境や温泉、田舎暮らしを求めて、本町に移住される方が増えています。

「旅行では何度も訪れているが、いざ移住となると不安になる」というのは、多くの方が感じる共通の思いです。厳しい冬の暮らしや生活環境など、移住する前にクリアしなければならないことは多々あります。

弟子屈町では、そうした不安を少しでも解消し、一人でも多くの移住者を迎えられるように平成18年度より専門の相談窓口を設けてさまざまな「移住促進プロジェクト」を実施しています。

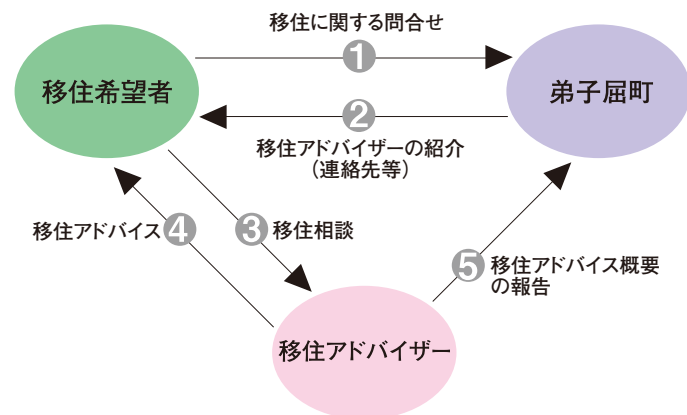


移住アドバイザー制度

後悔しない移住のために

「移住アドバイザー制度」は既に町内に移住されている方がアドバイザーとなり、これから移住する方や移住を検討されている方に対し、アドバイスをを行う制度です。相談方法は電話やEメールのほか、実際にお宅訪問し、移住に至った経緯や都会と田舎のギャップなど、実体験に基づいてアドバイスをいただくといったことも可能です。

「移住者はどういった生活をしているの?」「厳しい冬の生活には不安を感じる」「移住して不便だったところは?」などと不安を抱かれている方はぜひ、この制度をご利用ください。





4代目

中澤美喜雄 mikio nakazawa

なかざわ みきお／1961年生まれ。
高校卒業後しばらくは、運送業や建築業などのアルバイトをしながら、家業を手伝う。
1988年にフリーストール牛舎を建て、兼業から酪農専業へと移行。
現在は乳量、規模ともに町内屈指の酪農家となる。

結婚後、廣さんから経営を受け継いだ後も、夏の牧草づくりの時期以外は、依然として美喜雄さんのアルバイトは続いていたらしい。当時は親牛と育成牛を足しても34頭、所有地10ヘクタール。子どもが生まれて家族も増え、専業酪農家として生き残るには、規模を拡大するしかなかった。

生き残るための選択、それは規模を拡大し続けるという酪農経営だった。

■今や広大な牧草地を耕作し牛270頭を飼育する中澤牧場だが、4代目の美喜雄さんが家を継ごうと思った頃は、酪農だけで一家の生計を立てられる状態ではなかったそうだ。



「このあたりは夫が林業や土建業など外に働きに出て、主婦が農作業をこなす兼業農家がほとんどだった」というように、中澤家でも廣さんがケガで山稼ぎに出られなくなるまで、搾乳をはじめとする日々の作業は主に母と二子さんの仕事だった。

「ところが、それがワナのはじまりだった」と美喜雄さんは苦笑する。

牛の頭数が限定されるつなぎ飼いで対して、フリーストールだと頭数を増やさざるを得ず、その分設備にも投資することになるのが現実だった。投資した分の利益を上げるためには、さらなる規模の拡大が必要となり、結果として牛の数は今も増え続けているという。

もともと安定経営のための規模拡大ではあったが、なるべく負担を少なくと考えたにもかかわらず、多額の借金にもつながつてしまった。しかしもう後には引けない。牧草地を広げ牛の乳量を上げるなどの努力を続け、それがうまく回りだして目に見えて借金が減ってきた時、美喜雄さんはじめてこの仕事が面白いと思えるようになった。



3代目

中澤 廣 hiroshi nakazawa

なかざわ ひろし／1931年、最栄利別地区の農家に生まれる。祖父、父から受け継いだ土地を開墾し農業を営むかたわら、林業関係の仕事も請け負う。引退後は、町議や民生委員、身体障害者福祉分会会長などとして地域に貢献。



■弟子屈町は富山県の入植者によって開拓がはじまったといわれているが、最栄利別地区に住む中澤廣さん一家も、明治35年、祖父庄五郎さんの代に富山県高岡市から移住してきた。

中澤さんが若い頃に近所のお年寄りから聞いた話によると、明治30年代に富山県から移住してきたうち、鎧別川（銅路川の支流の両岸に入植したのは約50戸。川沿いに人が住むようになったのは、まず生活用水の確保が必要だったからである。人々は皆、昼間でも薄暗いほど大木が茂る原生林を自給自足のために開墾し、その時に出る造材を唯一の現金収入としたそうだ。

父廣三郎さんの代になり、初めて牛2頭（エアシャー種）を導入したのは昭和6、7年。廣さんが小学校に通う頃には8頭に増え、重さ約30kgの牛乳缶を、子どもの廣さんも毎日歩いて集乳所まで運んだという。

「鎧別川で半日も釣りをすれば、背負いきれないほどの魚が獲れたから、干して冬の食料にも保存したり」、学校から帰ったら薪づくりやそば挽きの仕事をこなすなど、当時は子どもも重要な働き手だった。

昭和20～30年は家畜の数も増えて半農半畜の農家が多く、中澤家も農耕馬を5頭所有し、じゃがいもやビートなど換金作物をつくるようになっていた。

廣さんが3代目として農家を継いだ昭和30年、乳量の多いホルスタイン種を20頭導入し、本格的な酪農家を目指すことになるが、これは弟子屈町全体が酪農地帯に変わりつつある時期でもあった。

さらに昭和40年代になると、トラクターが導入され、北海道の酪農はいよいよ機械化農業の時代の幕開けとなるのである。

「昔は何でも手作業だから、今と違って身体をフルに使っていたね」と、自らの思い出とともに、弟子屈の開拓の歴史を中澤廣さんは語ってくれた。

そして今、経営を息子に譲り農業からは引退したが、30年以上にわたって続いている乳牛検定組合検定員の仕事や、多くの地域活動など、廣さんの多忙な日々はまだまだ続くようだ。

富山県からの移民は皆、自給自足で生計を立てていた。



地域に生きる二世帯

酪農家・中澤家とその家族



エゾヤマザクラ

- 道道札友内停車場線札友内方面
- 本樹木は、郊外の丘陵地に一本、ひっそりとたたずんでいるが、開拓の歴史とともに120年の風雪に耐えた厳しさが十分伝わる樹木である。<指定番号8>



モミジ

- 釧路信用金庫弟子屈支店駐車場奥
- カエデ科の樹木。市街地の表通りから奥まった所に立つ本樹木は、市街地で指定された数少ない名木のひとつ。樹齢100年を数え、秋の葉の色は年々深みを増し、通りを往來する人の気持ちを和ませてくれている。<指定番号1>



エゾノコリンゴ

- てしかがフォトギャラリー横
- バラ科の樹木。別名サンナシとも呼ばれ、コリンゴの名のとおり野生のリンゴの一種である。赤く熟す果実は、鳥などの格好の食物となり、長きに渡って周囲の生態系に恵みをもたらしている貴重な木。<指定番号2>



ポプラ

- 国道 243 号屈斜路方面
- ポプラは別名セイヨウハコヤナギとも呼ばれ、日本には明治元年に導入された。本樹木は明治の代に入植し、苦難を乗り越えてきた屈斜路地区の歴史とともに年輪を重ねてきた木である。<指定番号9>



カツラ

- 国道243号屈斜路方面
- カツラ科、落葉高木。屈斜路湖の畔に立つ本樹木は、文字通り風雪という厳しい自然条件に耐えた350年の歴史を刻む木だ。湖を背景に従える姿は雄大で、眺めるものを圧倒する樹木である。<指定番号10>



ヤチダモ

- 弟子屈中学校体育館側河川
- 湿潤地を代表する落葉樹。推定樹齢180年。市街地を流れる釧路川の右岸に残る良好な緑地帯に根を下ろす、シンボリックな存在の木。釧路川の蛇行と摩周岳を一望できるビューポイントの目印の木ともなっている。<指定番号3>

弟子屈の名木

地域の象徴として親しまれている木や歴史的にいわれのある木、景観上優れた木などを名木と選定—。

エゾヤマザクラ

- 道道網走川湯線川湯方面
- 見通しの良い道路端の牧草畑に1本だけ存在する本樹木は、地域では「川湯の1本桜」と呼ばれている。満開時には遠くからも目立つ華やかな姿に、多くの人が車を停めて写真に収める。<指定番号11>



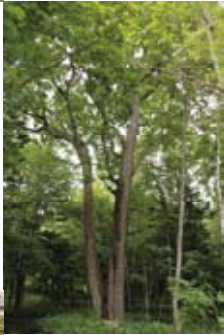
エゾヤマザクラ

- 国道 241 号奥春別方面
- バラ科であり、寒さ・雪には強い陽樹である。本樹木は、普段は広大な牧草畑の中で一本、静かな佇まいを見せているが、満開時には一気に華やかな姿となり、眺める人に感動を与えている。<指定番号4>



ミズナラ

- 道道屈斜路摩周湖畔線川湯方面
- 推定樹齢 450 年の本樹木は、名木の中でも最高齢である。原生林の中に深く根を下ろす姿は雄大で、大地とともに生き抜いてきた鼓動が聴こえるようだ。<指定番号12>



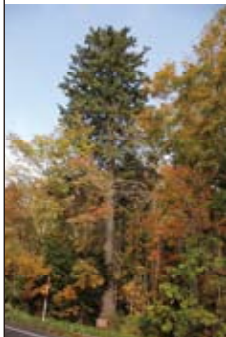
ミズナラ

- 国道241号奥春別方面
- ブナ科の落葉樹。秋にはドングリが熟し、シイタケ栽培の原木にも利用される。樹齢350年と推定される本樹木は、原生林の中でひと際際立っている。その姿は雄々しく、威厳すら漂っている。<指定番号5>



トドマツ

- 道道屈斜路摩周湖畔線川湯方面
- マツ科の常緑針葉樹。高さは 20 ～30m にもなる。寿命180年の樹種だが、本樹木は樹齢150年。原生林の中でなおも天に向かって伸びる樹姿は圧巻である。<指定番号13>



クロエゾマツ

- 道道屈斜路摩周湖畔線川湯方面
- マツ科の常緑針葉樹であり、高さは 30 ～40mにもなる。エゾマツは「北海道の木」に指定されている。本樹木は樹齢 250 年を数え、摩周湖のふもとの原生林にあり、道路脇なので比較的確認しやすい。<指定番号14>



モミジ

- 町道釧路川右岸沿線南弟子屈方面
- 別名イロハモミジ、ヤマモミジとも呼ばれている。樹齢100年以上。紅葉の時期には落ち葉で周囲が赤い絨毯を敷きつめたようになる。通りすがりの観光客が思わず写真を撮りたくなるほど見事に色づく。<指定番号7>



yoshiki nakazawa 中澤 好喜

なかざわ よしき／1985年生まれ。北海道立農業大学校を卒業後、弟子屈町に戻り実家の牧場を手伝う。農協青年部や4Hクラブにも参加し、牛乳の消費拡大のために仲間と考案した“牛乳もち”が評判となる。2010年7月には初の男児(双子)が誕生。



5代目

「最初から良いと思って選んだわけでもないけど、何事も自分で決められるし、やった分だけ見返りもある。時間を上手に使えば、遊ぶ時間だってけっこうつくれるから、今はこんな良い仕事はないと思う」

美喜雄さんのそんな言葉を受け、二人三脚で中澤牧場を支えてきた妻の多恵子さんも、「どうせやるなら楽しくやろう」と思いつく時は働くけど、遊ぶ時は徹底して遊ぶ。そんな親を見ていて、息子も酪農をやる気になったんじゃないかな」と笑顔を見せた。

さて、5代目となる好喜さんは、中学生の時すでに、親から酪農家になるかどうかの選択を迫られたという。

自分自身はほとんど独学でやってきた美喜雄さんだが、もし継ぐ気があるなら、高校から専門知識を学んでおいた方がいい、との思いもあったのかもしれない。

「小学生の時から手伝っていたから、酪農家を継ぐのに抵抗はなかった」。好喜さんは迷わず酪農科がある江別の酪農学園大学附属高校に進学した。もともと、その高校を選んだ理由には、「修学旅行でヨーロッパに行ける」ことも大いに関係していたらしいが。

ともあれ、高校卒業後は北海道立農業大学校に入学し、酪農家を継ぐべく勉強に励んだ。

5年前に実家に戻ってからは、

地元の農協青年部や4Hクラブ（※）などにも積極的に参加。4Hクラブの仲間と牛乳の消費拡大をはかるために考案した「牛乳もち」は、地場産のどんぶり粉も使っていることから、青年農業者会議の全道・全国大会で優秀賞を受けるなど高い評価を得ている。

「この家で一番働いている」と多恵子さんに評されるほど、今では牧場を支える柱になりつつある好喜さんに、2010年7月、妻聖羅さんとの間に双子の男の子が誕生。中澤家は4世代8人が同居する大所帯になった。

毎日家族で囲む食卓には、子どもたちの成長に重ねて美喜雄さんや好喜さんの子ども時代の思い出なども、話題に上るのだろう。そして時には、クニ子さんから主婦の知恵などがさりげなく伝授されるかもしれない。

それらは、100年以上この地で暮らしてきた家族の歴史として、これからもきつと語り継がれてゆくにちがいない。

※より良い農村、農業を創るために活動している組織。4Hとは、Head(頭)、Heart(心)、Hands(手)、Health(健康)の4つの頭文字。



TESHIKAGA GA SURVEY

弟子屈町勢要覧 2010 (改訂版)

平成26年10月発行

発行:弟子屈町

〒088-3292

北海道川上郡弟子屈町

中央2丁目3番1号

TEL 015-482-2191 (代表)

<http://www.town.teshikaga.hokkaido.jp>

編集:弟子屈町まちづくり政策課

協力:弟子屈町の皆さん

制作:有限会社バルクカンパニー



毎年10月下旬に冬の使者として飛来する白鳥は、弟子屈町の町鳥です。屈斜路湖、釧路川で町民と厳しい冬を共に過ごしていることから制定されました。また町花はツツジ、町木には桜が制定されています。